

色白の彼

作田 和奏

コニニ千ハ

小学生になるかならないかのそんな時、携  
帯屋に入って一番に声をかけて来てくれたの  
は色白の彼だった。彼はタブレットを持って  
いて、色々なゲームで楽しませてくれたり、  
トイレの場所を教えてくれたりとサービス上  
手な人だった。

昼食時になり、親につれられ店を出る時に  
ふと思った。彼はおにぎりを食べる訳でもな  
さそうだし、空腹にはならないのだろうか。  
昼食から帰ってきて、私は彼を見ては「と  
した。彼の足元にケイブルが差さっていたの  
だ。それを見て私は、彼はあのケイブルを通  
してごはんを食べているというところが不思議  
とすんなり受け入れられた。  
それから長い時が経ち、彼がいた店を通る  
時にふと思う。電気は彼の命だったのだと。  
そしてそれは彼だけだったのだろうか？と。

私も、電気がなければ暑い夏、寒い冬に快  
適に過ごすこともできないし、パンをトース  
ターで焼いてスパゲツティと一緒に笑いな  
ら食べることもできない。クリスマスツリー  
だって、電気がないと光れない。私たち人間  
にとっても電気からもらう幸せはたくさんあ  
ると思う。

あの時から長い時間が経ちや、たけど、君  
としたゲームは本当楽しく幸せな時間だっ  
たよ。ありがと。